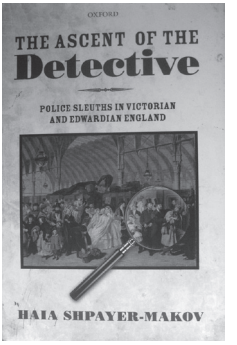
書　評



Haia Shpayer-Makov, *The Ascent of the Detective: Police Sleuths in Victorian and Edwardian England*（Oxford: Oxford University Press, 2011）

中島　俊郎

本書の著者 (Haia Shpayer-Makov) はイスラエルのハイファ大学でヨーロッパ史、イギリス史を講じている歴史家である。学者としての出発点はアナーキズム研究であったが、イギリスの警察組織論に研究シフトを移し、2002 年にその成果である *The Making of a Policeman: A Social History of a Labour Force in Metropolitan London* (Ashgate Publishing, 2002) を著している。ここでは警察当局と警官の関係を雇用と非雇用という、社会経済学的視座に立った分析を試み、労働環境としての警察組織、職階などといった「経営者側」の状況を詳述すると同時に、非番日における余暇の消化、警官同士のコミュニケーションのあり方などの「労働者側」を描いた研究書であり、ロンドン警視庁を主軸とする文化史でもあった。本書の第 1 部 (‘The Detective in his Work Milieu’) の核となる部分がすでに着実にリサーチされているのが前著によって確認できる。さらに本書の実質的内容は、刑事という職務を論じた共編著 (*Police Detectives in History, 1750–1950* [Ashgate Publishing, 2006]) から発展したもので、本書の序論として読むことができよう。

本書は、これまでの警察、警察官にまつわる文化史研究から欠落していた「刑事」と「私立探偵」という存在に焦点をあてる。その職務が濃密なかたちで展開した 1842 年から 1914 年という期間に限定して、どのような階級の人々が刑事、探偵という職業につき、どのような職場でいかに職責をはたし、（とくに制服警官と対比して）その評価はいかばかりであったか、警察組織内でどのような位置にあり、どのように昇進していったか、現実の事件捜査にはどのようなかたちで参画したのか、などの諸問題

を具体的に検討していく。本文 309 ページに加えて注が 70 余ページを占めている手堅い研究書となっている。また 30 ページ以上にも及ぶ依拠した参考文献をみれば第一次資料が大半で、それらが十全に活用されて書きあげられている。刑事、探偵という像は実像と虚像がからみ合い、峻別しがたいゆえ、また人々がいだいているイメージは両者が一体となってしまっているので、著者は現実の社会的存在と想像的産物を「並置」して、両者をあえて往還させることで探偵、刑事という実像により迫ろうとする。それゆえ本書は二部構成になっているのである。

さて刑事、探偵が同時代人からどのような評価を得ていたのかを語る格好の題材がある。画家ウィリアム・パウェル・フリースが 1861 年から 62 年にかけて制作した『鉄道駅』という大作にはグレート・ウェスターン鉄道にパディントン駅から乗客が乗り込もうとする模様が描かれている。作品はヴィクトリア朝の階級社会に生息する人々を個別に視覚化しようとした野心作だが、群集に混じり詐欺師とおぼしき人物を二人の刑事が逮捕しようとする劇的瞬間が活写されている。描かれた刑事たちはスコットランド・ヤードに属する実在の刑事たちである。フリースは骨相学的に人物を描くことで類型化におちいることなく何十人もの人物を描き分ける能力を備えていた。ここでは犯人にかける手錠をもつ刑事の親指に筋肉の緊張が強くみられるが、これは同時にロンドン市民が刑事に寄せる力強い信頼と期待を如実に具現化したものといえよう。

『鉄道駅』に描かれている刑事はヴィクトリア朝後半期の姿であるが、それ以前に登場してきた刑事、探偵はじつにマイナーな存在でしかなかった。それどころか、ことごとく反＝イギリス的価値観を体現して、とうてい尊敬を集めえない職種でさえあった。そうした刑事、探偵という実像が、一転して社会正義を表象し理性を体現した、まさにイギリスの理想を投影した像へと変貌していく。こうした価値観の変遷にみられる逆転現象を探究していく営為こそ文化史研究の目的であり、醍醐味といわねばなるまい。

まずイギリスの警察の起源から刑事の登場までを瞥見しておこう。そもそも 1822 年、内務大臣になったロバート・ピールはロンドンの治安維持の必要を感じ、警護隊を組織した。それは「ピーラーズ」という愛称を奉

られたが、大都会でおきる犯罪の数々を取り締まるにはとうてい用をなさなかった。その後もピールは組織について試行錯誤を重ねていくが、ウェリントン首相のもとピールは警察組織に大改革を断行した。1829 年 4 月、スコットランド・ヤードが設置され、千余名の警官が制服姿で任務についたのは 9 月 29 日火曜日のことであった。

スコットランド・ヤードに勤務する警官に関連する研究書、文化史はこれまで数多く書かれてきたが、不思議なことに「刑事」については研究書らしきものがまったくといっていいほど書かれてはいない。本書の著者がこの点を疑問に思い、刑事という未開拓の、それでいてシャーロック・ホームズのような私立探偵が君臨している文化的土壌を解明してみようとしたのが本書である。

イズリントンに新しい監獄ができた 1842 年、スコットランド・ヤードに犯罪捜査課 (Criminal Investigation Department) が設立されて正規の刑事が登場してくるのだが、ほぼ半世紀後でもその人数はわずか 300 名ほどで、全組織の僅々 2 パーセントしか存在していなかった。民間の私立探偵になるとさらに少数で、離婚などの民事事件ばかりを手がけ、犯罪捜査に手をそめることはついぞなかったのである。ヴィクトリア朝イギリスには、1850 年にアメリカでアラン・ピンカートンが設立したような私立探偵社の存在はなく、それどころかピンカートン探偵社が請け負っていた政府要人の身辺警護、ストライキ介入などの実務は夢想だにできなかった。

それどころか、ヴィクトリア朝のイギリスは、探偵のような職業が存在していなかったことを誇りとしていた（逆に、堕落の国フランスにふさわしい職業とみなしていたようだ)。身分を秘して平服に身をやつし、人々の行動を監視し、個人生活のなかへ土足で踏み込むような輩の仕事は、ヴィクトリア朝の価値観から対蹠的な位置にあるものであったからだ。まさに「反＝イギリス的価値観」の対象そのものであったわけである。（シャーロック・ホームズの絶大な人気はイギリス的価値観をみごとに具現化しているところにあるといえようか。）

じっさい刑事の名声確立には 1910 年 1 月に起きた「クリッペン事件」が契機となっている。ロンドン在住のアメリカ人医師 H・H・クリッペンは、女優である妻を殺害し、遺体を切断して、カナダへ逃亡を企てた。ス

コットランド・ヤードの主任刑事ウォルター・デューがクリッペンと少年に変装した愛人を追いつめていくのだが、この逮捕劇に衝撃度を加えたのは新しい科学技術である無線の力にあずかっていた。大西洋を股にかけた刑事と犯人の追跡劇の一部始終を欧米の新聞読者は堪能したわけである。刑事の犯罪捜査の過程が初めて陽の目をみて、刑事の捜査手腕が高く評価された事件であったのだ。逆にそれまで刑事は影のような存在であったともいえる。

さて、本書を文化史研究の規範にせしめているのは、第 2 部 (‘Detectives and the Print Media’) にある。今日では「探偵小説」というゆるがないジャンルが形成されている文学史的事実に注目してみるとき、まだスコットランド・ヤードに 15 名の刑事しか配属されていなかった時期に新聞、雑誌にはすでに「探偵小説」が盛んに掲載されていたのである。刑事、私立探偵という存在そのものがメディアの力によってかなりの程度までつくりあげられたものであると本書は具体的に教えてくれる。その意味で本書をヴィクトリア朝のメディア研究史として読むことも大いに可能である。第 2 部のなかでは図版、図像解析が多くなされているが、著者の所論を補強しているのは言うまでもない。

刑事、探偵像の確立に小説家ディケンズの存在は無視できない。ディケンズ自身、犯罪事件に並々ならぬ関心をいだき、同時代に起きた殺人事件を裁く法廷はできうる限り傍聴していた。ディケンズの関心は犯罪そのものにとどまらず行刑学にまで及んでいる。ただ注意しなければならないのは、ディケンズが犯罪世界への興味から刑事という職業に注目をしていたわけではないということだ。ディケンズは社会正義という観点から、犯罪を取り締まる刑事という職種をみていたのである。じっさいにスコットランド・ヤードから数名の刑事を派遣してもらい、ディケンズ自身がインタヴューを試み、潤色のない実像を記事にして伝え刑事像の確立に大いに寄与している。

ディケンズと刑事の関係は一方通行で終わったわけではない。刑事たちはディケンズをロンドンの犯罪がうごめく最暗部へと案内し、小説家が小説世界を描くのに大いに協力したのである。犯罪多発地域のパブに現れたディケンズは「暖かい歓待を受け、贋金鋳造者にはかしずかれスリたちか

らは一目おかれた」存在であったという。ディケンズが発行経営していた個人雑誌『ハウスホールド・ワード』『オール・ザ・イヤー・ラウンド』には小説家自身の筆になる刑事像が幾度も登場し、一般読者に刑事という職務を認知させた貢献は大であるといわねばならない。すでに 1852 年にディケンズは『荒涼館』のなかに探偵を登場させているが、1893 年になされた『ウェストミンスター・レヴュー』の推計では、全英 800 誌ある週刊誌のうち、「探偵小説」が 240 篇も含まれていたという。

本書のなかでもっとも特筆すべき部分は、退職した刑事が書いた回想録を論じた第 7 章 (‘Police Detectives as Authors’) である。回想録には在職中に遭遇した事件やその解決にまつわる挿話から警察組織内部の動向にいたるまで、職務にかんする事柄が縷々と語りつづけられている。ただ、同時代に盛んに書かれた回想録と著しく異なるのは、元刑事である語り手自らについてほとんど語られていない点である。出自、家庭環境、日常生活など個人にまつわる情報をかたくなまでに語ろうとはしない。回想録の冒頭数ページで同時代の回想録ならば大半を占めるであろう生涯を大雑把に語りつくされてしまい、それ以後は犯罪捜査にほとんど紙幅が割かれる。そして退職とともに回想録も終わり、退職後の日々については寡黙のままである。大手出版社がこぞって刑事、探偵の回想録を出版したが、17 世紀初頭から出版されている辻強盗、泥棒の一代記と、事件を特化して描写している点では大差がないのである。だが、本書の著者は出版社の要請にせよ、この紋切型の語りにこそ、職業に忠実に殉じた姿があるのではないか、と結論づけている。逆に、語られていない空白部にこそ「真のすがた」があるというわけだ。そもそも翻れば、探偵小説の嚆矢になったのはパリ警視庁を退職したウージェーヌ・フランソワ・ヴィドックが書いた『回想録』(1828–29) ではなかったか。

本書が出版された同年に本書の意義を深める作品が二点出版されている。出版社に送付したが行方知れずになっていたアーサー・コナン・ドイルの処女作 (*The Narrative of John Smith*) が発見され、ブリティッシュ・ライブラリーから出版された。また、アーサー・コナン・ドイル財団からシャーロック・ホームズの正典入りを正式に認められた Anthony Horowitz の *The House of Silk* も刊行され、コナン・ドイル死後、初めてのホームズ

物語が誕生したわけである。この新作の小説は名うてのベスト・セラー作家の手になり、物語の叙述は想像力を駆使して可能であるが、舞台となるヴィクトリア朝時代を再構築するにはいかなる手立てが必要であるか、といった抜き差しならぬ問題に省察を迫られたという。同時代作家ギッシング、ディケンズ、トロロープ、モリソン、メヒューなどの作品、資料に依拠したのは当然であるが、もっとも助力を与えたのはヴィクトリア朝文化研究の蓄積であった。

時代文化を読解するためには、厖大な資料を集め検討し、しかるべき想像力を駆使して実像を見出すことが必要不可欠になってくる。時代考証にたえない探偵小説、ミステリー作品はほとんど支持をえられない。読者の精緻な読みをまえにして、テクストの綻びは推察を阻止してしまい、物語世界の毀損をまねきかねないからである。

このように探偵小説の世界を考えてみると、われわれの文化史研究の探究過程と一脈通じているのではないか。犯罪捜査と文化研究を同一視する愚は避けたいが、研究者には刑事、探偵以上のリサーチ力が求められている。文化現象は単一の犯人という小さな枠組みにはとうていおさまらないからである。どうやらヴィクトリア朝の刑事、探偵を論じた本書は、文化研究の在り方そのものに問いをかけているようだ。